

戦国小町苦労譚ショートショート詰め合わせ

0003

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「夾竹桃」先生の『戦国小町苦労譚』の二次創作短短編詰め合わせです。

目次

戦国小町苦労譚シヨートシヨート詰め合わせ（三本）

【面頬】

日本の鎧兜には面頬という物がある。

戦場で顔が剥き出しのままというのは、視認できていないところから弓矢による攻撃などけつこう危ないのである。

もちろん、面頬で全てを完全に防ぐことができるものでもないし、顔を覆うということから頑丈さを追求してあまり重くしすぎて動きに制限がかかつてしまう。

結局のところ、強度面との釣り合いの安排と相談ということになる。

森長可という歩く織田家の「妖怪首おいてけ」もしくは「血濡れの赤鬼」は、彼の同僚でもある足満から奇妙な面頬を贈られた。

普通面頬の色合いは鎧兜に準じた色となる。

最も利用される色は黒が多く、それ以外では漆塗の褐色などがあるていどあることからも、この贈られた面頬はかなり異様であった。

その色は純白。

しかも、目元以外に穴がいつさいない無機質さを感じさせる奇怪なものであった。

確かに異様な白い面が鎧兜にはめ込まれている様は不気味な威圧感を周囲に振りまく。

「あの〜、あれって

長可が新たに手に入れた面頬を兜に合わせて いる姿を見ながら静子が足満に小声で話しかけた。

「……ホッケーマスクですよね…………」

現代で過ごした日々の中で静子の家に保護された当初、足満は自分に抜け落ちて いる生活の常識を得るために図書館詰めすることと様々な映画を見まくっていた。

以前、彼女の姉が見たい番組があつた直前に、彼に絵の動く物の怪の類と怯えてテレビを壊されしまった腹いせに、彼の見る映画の中

に某血糊・残虐表現たっぷり映画を混ぜられていたことから彼の目にアノ映画が目にする機会があつた。

当時、画面上で現れる疑問に答えるべく同席した静子も、もちろん、残酷描写が好きではないにも関わらず見させられたげんなりさせられたのであつた。

「そうじや、あれだけ立派な鉈を得物にもしている勝蔵にはお似合いじゃろう」

大真面目な顔で自信満々の足滿の返答に静子は顔をしかめる。

血をかぶつて朱に染められた白い仮面：しかも彼の過去の所業を鑑みてみると似合い過ぎである。

コレ、イケナイヤツじや!?と容易に彼女の頭に浮かんだ。

「大丈夫、今はまだ米国がないからどこからも訴えられることない」足滿はニヤリと人の悪い笑みを浮かべた。

『紅伝説』

昔むかしあるところに、とても悪いと評判の鬼がおつたそつな。

この鬼、ともかくにも乱暴者で、時が戦国の世であることを鑑みてもあまりにも傍若無人であつた。

そりやあ「鬼」なのだから、人の所業から逸脱しているのは当たり前とも言えよう。

しかしながら、あるとき巨大な狼に乗つた近衛静子様が大いなる神の御使いとして調伏し善導したのである。

そして、この「鬼」は人の名前を与えられ、森勝蔵長可となつた。

しかし、いくら人の形をしていても、元が「悪鬼」の類である。

いざ、戦に赴くと周囲の血の匂いに昔の己を思い出すのか、愛用の槍「人間無骨」（にんげんむこつ）で目の前にいる相対するものたちを名前の通りあたかも骨もないかのように文字通り叩き潰した。

その姿は常に被害者の血や臓物によつて朱に染められ、血臭を辺り一面に彼が近づいてくるだけでまき散らした。

この悪鬼が、戦にその身を投じるときに叫んだ言葉が「紅（くれな

い）だうつ！」と言つていたかどうかは、当時の時を共にしたものたちしか知らない。

『蝶の止まり木』

織田氏は源平交代を意識していたが故に平家の末裔を名乗つていつた言われている。

元々、越前の織田氏は神職の末裔であり、簡単に言うと越前織田の荘の剣神社で代々神主をしていたということである。

斯波氏の領土に尾張、遠江が加えられて尾張に織田氏はついていつたとされている。

家紋は木瓜紋が有名であるが、あまり知られていないかもしれないが、これを含めて信長は七つの家紋を持つていた。その中でも奇妙な家紋が一つある。

揚羽蝶紋である。

揚羽蝶紋は平家のものであるが、一般的に横向きの蝶の図版である。

しかし、唯一、信長が使つたとされている陣羽織の揚羽蝶紋に形状が違うものであつた。

普通、平家の揚羽蝶紋とは、横向きの蝶が羽を立てている（揚げている）。

陣羽織に描かれている信長の蝶紋は、蝶がとまっている正面から見た象徴的な印象を与える図像であつた。

ある日、静子は何となく尾張一番の自由奔放番付横綱の濃姫に聞いてみた。

あれやこれやと濃姫に遊ばれていることが多いという自覚がある静子である。

たまには自分が聞きたいことを聞くのも構わないかも、と、昔（時間転移前）から疑問に思つていたことを聞ける機会があるので今まで必死に生きていくことばかりだったので、ふと思い出したついでで疑問が口から出たのであつた。

「御屋形様の陣羽織の蝶紋つて平氏の揚羽蝶紋と形が違いますよね。

あれって何か特別な意味があるのですか？」

彼女の言葉に信長の正室は、うふふ、と笑みを浮かべてから袖で口元を隠した。

「そんな恥ずかしいことを妾に言わせるのかえ。あれはアレじや。妾の諱にかけて陣羽織に背負つているのに決まっておるのじや」恥ずかしや、と袖で顔を隠すようにお惚氣を口にする。

江戸時代の創作という説もある濃御前の諱「帰蝶」のことを言つているのだと静子も気づく。

「えっと、それって…」

濃姫の歴史好きについての衝撃発言であつた。

冗談めかした物言いではあるが、何とはなしに暴走族やヤの字の商売の方たちが「命」とか恋人の名前を刺繡したり、刺青をいれたりするのと同じ感覚なのかしらん!?と納得してしまつた静子であつた。

戦国小町苦労譚シヨートシヨート詰め合わせ（その2）

『根昏盧乃魅崑』

尾張の静子の屋敷には世界中の様々な書物が所狭しと所蔵されている。

国内の未来の世に散逸されてしまつていたはずのもの。

南蛮にて禁書とされてしまつていたが、何やら本を高値で買い取る異教徒の外国人がいるなら錢に変えてしまえと売りつけられたもの。それどころか焚書になりかねないだらうものまでも…。

そして、彼女は気が付いてしまう。

ある物語において禁断の書物。

その存在そのものが創作作品上のものと言われていた本が明の古書として紛れ込んでいた。

静子の図書室には不文律の決まりがある。

必ず静子自身が最初に読む、ということだ。

彼女がまだ手を付けていない新たに入荷してきた本の山は彼女自身の忙しさに比例して大きくなつっていた。

「……根昏盧乃魅崑…当て字っぽいよね……」

その本は何の皮を使っているのか一見、分からぬ総皮張りの表紙。

しかも、ご丁寧に本が簡単に開いて中の書が抜け落ちないためか鍵でしつかりと閉じられており、鍵自体も紛失しないように紐に括られたものが一そろいになつていた。

「?…ね…くろのみ…ん…これは、もしかしてネクロノミコン!!?? クトルフ神話の架空の魔導書よね…うそでしょ…本当に実在していたなんて…変わった皮の表紙…」

表紙の表面をそつと撫でてみる。

滑らかな感触であるのだが、気のせいであろうか、どこかかび臭い腐臭のようなものが漂ってきたような気がした。

「うわ〜、悪趣味でイヤ〜な感じ。人の皮でできている!……くわばらくわばら…触らぬ神に祟りなし…この鍵つて開いて読むとアブナイつて意味かも……」

ぶるりと体を震わせると手に取った本をそっと本の山に戻す静子であった。

そして、この本を手に取ってしまった静子が、その夜に不可思議な夢の世界へと誘われたのは別の話。

『シズコ・ブートキャンプ』

戦国時代はいざ知らず現代の米国の軍隊にはブートキャンプなる口語が存在している。

所謂、新兵への教育・訓練プログラムである。

某エクササイズのトレーニング・ビデオにあるように、後に軍隊式訓練 자체を意味する言葉へと変化している。

そして、静子軍である。

預けられた新兵たちは、必ずこの洗礼を浴びることになる。

「静子軍の心得、一つ、出来ない子は出来るまで徹底的にやるつ！一つ、出来ない子が出来たら褒めた後、さらに練度を上げて訓練つ！！一つ、最初から出来る子は出来ないと言うまで、練度を上げ続けて訓練つ！！」

静子軍のみならず、織田家のヤヴあい人として広く認識されている森勝蔵長可が兵たちを睥睨する。

「お前ら俺の言葉を復唱しろつ」

長可がどこかの国の訓練教官鬼軍曹の「とく大声を張り上げた。ノリノリであった。

『めしてろ?』

下間頼廉は静子たちの姿を見送った後、教えられた町へ足を向け後悔した。

道を挟んで多くの料理屋が軒を連ねて いる。

鰻の炭で炙りながら滴る甘辛い付けダレが焦がされて香しい匂いを辺り一面に漂わせる店。

川に遡上してきた鮭を使つたハラコ飯の店。

最早、尾張名物になつてきている醤油を贅沢に塗つて網の上で炭火焼きするだけの焼握り飯。

最近、特に人足たちに人気がある焼き鳥屋。

とにもかくにも目というよりは鼻と胃袋に毒な場所であった。

彼は鋼鉄の意思で、その場からゆつくりとその場を離脱する。

冷や汗を浮かべながらも、来たものを誘惑し堕落させる天魔の技に満たされている場所から。

戦国小町苦労譚シヨートシヨート詰め合わせ（その

3)

『コワイ空番』

静子のいる場所には、身内に対しては襲い掛かることはなくとも、見慣れない侵入者にはその身をもつて体験することになる聊か物騒とも言える洗礼。

地上には巨大な大陸産のハイイロオオカミやネコ科のユキヒョウなどという見るからに凶悪な生き物がいるのだが彼らはまだ温厚な部類である。

真に恐ろしいのは地上ではなかつた。

中央・南アメリカ森林原産のオウギワシの「しろがね」は、英名「Harp by Eagle」と呼ばれている。

ハーピィーとは、ギリシア神話でのハルピュイアのことと、女面鳥身の怪物のことであり神話の中でもアルゴ号の冒険譚などにも出てくる。

現地での主なエサは猿の仲間やナマケモノなどである。

そしてこの場所は鋭い爪で木にしがみついているナマケモノを木から引きはがして渾う魔物を想起させるほど大きな鷲／東南アジアにいるサルクイワシよりも、普段の餌として猿を狩っているという研究結果がでている／が自身の壇と定めている場なのであつた。

それほどまでに大型の猛禽類が戦国時代の日本でどんな活躍をしてくれるかは推して知るべし、というものもある。

静子の屋敷の周囲には他所の地では、なかなか出会えない対間者向け警備のエキスパートたちがいる。

ハイイロオオカミのヴィットマン・ファミリーの耳と鼻。

そして、俗に空番と呼ばれている猛禽類やカラスたちの目。

これらの警戒網から逃れることは非常に厳しいものがあるのである。

(大切なことなので二回語らせてもらつた)

特にこの猛禽類たちは招かざる客にとつて凶悪な狩人であり、彼らが自身の縄張りと認識している周囲でその目を搔い潜ることは非常に難しく、不審な存在には容赦のない攻撃に晒され時に人間すらも命を奪われることがある。

特に夜でも空から無音で襲来する大型のミミズクへ特定されていなが恐らくワシミニズクへや生ごみや間引かれた作物や作物に就く虫などを餌としている共生関係にあるカラスたち。

これらに気づかれずに接近し情報を得ていくことは容易なことはなく、ましてや間者たちにとつて非常に危険な存在でもあつた。

ある日の早朝、静子の住まう地の一角で盛大な悲鳴が響く。

静子の屋敷の「警備をしている中の人たち」たちは、「ああ、またか」とその声の主の方へ冷静に向かっていく。

最大握力140キログラム以上と言われるオウギワシの鉤爪の攻撃を受けて重傷に陥っている覆面の男が頭を血塗れにして地面を転げまわっていた。

もちろん、男はいとも簡単に捕縛された。

『戦を行つてゐるのは人だから』

織田軍の軍議はある時期を境に大きく変わった。

特に変わったのは本格的に美濃攻めを行つたあたりから顕著である。

それは、織田家内部の武将たちについては、これまでの力攻め一辺倒な小細工のほとんどない分かりやすい戦とは一線を画す策・発想の洗礼を受けることでもあつた。

そして、唯でさえ氣難しいところがある御屋形様（信長）の一層自分たちには見えない先を見つめた「やり方」に武将たちは頭を捻らせることになつた。

また、上から降ろすだけの命令が、意見を求める評定への広がりが生まれることも何人かにとつては悩ましいことでもある。

意見を求めてくるとは、言葉として聞こえはよいのだが徹底的に何故どういう理由があつてその結論に至つたのかということを明確に説明することも求められる、ということでもあるのだから。

もちろん、持ち寄るだけの論を持つことができる者たちにとつては歓迎する変化でもあつたのだが。

これは綾小路静子という、まだまだ若い二十歳にも満たない小娘が、織田家相談役という信長の側近中の側近と言える新たな職務に就いたことに連動していた。

稻葉山城の攻略において、昼夜を問わず攻める部隊による相手を疲弊させる策が生まれた。

それは、「守備をしているのは人間である」という不文律に則つた攻め方であるのだつた。

後にその城攻めの様子について森三左衛門可成に意見を求められた静子はこう応えたという。

「それはそうなるでしょう。人は眠ること、食べることを充分に取れないし本来の力をだせなくなりものですから。御屋形様のその策は相手の状況を制御できるならば有効な一手となりますよ」

戦評定の時に御屋形様自身が口にした言葉をなぞるような即答であつた。

彼は信長に優遇される彼女の持つている価値をより一層強く感じさせられた。

『火つけ三昧』

彩が静子の元に来て間もないころ、日ノ本では知られていなかつた「火を起こすためのある道具」を教わつた。

高温多湿で雨が多い東南アジアで産声を上げた発火器具で俗にファイアーピストン（ファイアーシリンダー）と呼ばれるものである。雨の多い土地ということは火種を維持し続けることが難しいということである。

それ故に必要な道具さえ用立てれば、どこででも火をつけることができる道具というものが生まれたのだと考えられる。

閑話休題、当時（戦国時代）の日ノ本において、火縄銃の普及の広がりと共に場所を選ばない着火道具の価値は非常に高くなる。

このとき、彩は十歳に満たない幼さながらも、小間使いとして入り込むことを前提の間者としての教育を受けていた。

その過程で身に着けてきたものにも存在していない簡単な道具での火起こし。

そんな、彼女にとつて知りえぬ知識の塊である道具と使い方をいとも簡単に教え与えるなど想像だに値しないことでもあつた。

そして教えた時の静子の言葉もかなりオカシイ。

「これでどこででも付け火ができるよ」

一瞬、彩の思考が固まった。

虫も殺さないような笑顔で言う、彩自身の正体をもしかして見抜いているのでは!? という台詞であつた。

しかしながら、その物言いには全く他意のない軽口であることが伺え、彼女は心の奥底で頭を抱えた。

戦国小町苦労譚シヨートシヨート詰め合わせ（その

4)

『G O! G O! O—DA!!』

近衛前久の美濃の邸宅で口にした熱燶で飲んだ酒は彼の胃の腑を強烈にその旨さを焼きつけた。

日頃呑む濁り酒とは一線を画す杯の底に描かれた絵を妨げることなく見せる透明度。

しかも、前久の言葉によると織田の家中でも滅多に手に入らないほどの酒だと言っていた。

逆転の発想をするならば、これは織田家に仕える者の間で立場が上になれば手に入るということでもあると容易に予想がつく。

また、先に織田殿から贈られた他所で作られたものとは一味違う梅干しも尾張で作られているとのこと。

そして、前久に用意された肴のカラスミ。

酒と当てにする肴々この両方とも今の織田家の治世によつて生産されたものばかりであり、いずれも素晴らしいものがある。

美濃・尾張の地でそれらを実現させたのは軒猿たちの調べによると、その出どころは明らかに近衛静子だ。

信長の懷刀、近衛静子の行う政は、乱世の終息と民が穏やかに暮らせる新しい風を今世に吹かせてくれる。

雲水に扮してかの地を見た限り、彼女の齋した安寧を謳歌している民らの顔は他の地で見ることができないほど明るく眩しかった。

武田が破れ、世の流れは大きく変わる。

我が上杉も大きな決断をするべき時がきていた。

と、大義を語りつつも小さく呟く「旨い酒と肴もあるし」と。

そんなことを上杉謙信が細やか酒への愛を乗せて考えていた矢先であった。

織田からの使者として足満と近衛前久が春日山に姿を見せたのは。

その後、上杉の織田への従属という反織田包囲網陣営のみならず、天下の趨勢を見守る世間をも驚愕させるべきことが起きるのは別の話。

『猫?』

「ゆつきー」と「しろちよこ」はユキヒョウである。

そう、現代では非常に個体数が少ない（一万頭には満たなく実数五千頭前後とも言われている）幻の生き物とも言われるユキヒョウなのである。

名前に「ヒョウ」という種を示す名前がついているが、ヒョウよりもトラに近い大型のネコ科肉食獣である。

また、この種はライオンなどに代表される「がおー」という咆哮ができる。

吠えるのではなく、猫のように「にゃあ」と鳴くという。

ごく少ないが現代の日本国内の動物園にも個体があり、その鳴き声を耳にできる機会があるかもしれない（動画共有サイトなどで見ることもできる）。

それ故、幼獣のうちは大柄ではあるが十分に猫と間違えられる可能性が高いのであつた。

ただし、最終的にはるかに大きく成長してしまうのだが。

体格的に体長一二十センチほどまでとされるので、大きくなつてもヴィットマンの家族達級までは届かないと想像すると良い。

静子の屋敷には住むネコたちのために、所謂、キャットタワーが作られている。

もちろん、元々はタークリッショアンゴラやマヌルネコたちのためのものである。

しかし、この猫の城に「ゆつきー」と「しろちよこ」も自身の持つている本能に従いこの塔の制覇に参戦した。

それは、自分たちも身体が大きくても「猫」!!だと主張しているかのようであつた。

もちろん、まだ成獣ではないのでそれほどではないのだが、それぞれが思いつきり頭やら尻尾をはみ出してしまう。

出ている部分がだらしなくダラリとぶら下がっている姿が見たものに微妙な感想を齎しているのも推して知るべしというところであつた。

『くうくつ』

その日はとても暑い日であつた。

茹で上がったばかりの枝豆。

表面はカリカリの中は肉汁に満たされた鶏の唐揚げ。熱々の細長く切られた揚げられたジャガイモ。

そして、冷たくキンキンに冷されたビール。

目の前に並べられた安土桃山時代に帰還してからも求めてやまなかつたものに足滿は目を輝かす。

この瞬間の彼は、普段、仏頂面で素つ気ない態度が基本姿勢な彼とは別人であった。

「足滿おじさん、何かすごい嬉しそうだよ」

用意した料理の皿を並べている静子が口を開いた。

「初めて夏の日に静子の父君と呑んだビールは最高だつたからな」

どこか感慨深そうに足滿はなみなみと注がれたビールを口に運んで一息にあおる。

くうくつ、と思わず漏れる声と表情はいつになく満足そうであつ

た。

『辛い調味料』

静子は調味料の種類を広げることを考えていた。

醤油、出汁入り味噌、七味唐辛子あたりは、広く浸透し織田家に莫大な富を齎してくれている。

柚子胡椒は、今のところ、まだまだそれほどの人気を博すことはできていない。

九州地方や柚子の産地ということから徳島などで生産されている辛味調味料であるが、塩加減によつて日持ちに影響が出るところもあり、少量ずつ作つては使い切ることを前提としているものなので保存という部分で先行した売れ筋調味料たちと比べると弱かつた。

「やっぱアレかな？」

彼女の姉の愛用していた調味料を思い起す。

綾小路家一の武闘派な武器マニアで辛い物好きでデス・ソースやらハバネロ・ソースを愛用していた姉の味覚は、イロイロと問い合わせたいところもあるが、当時、姉に腕力で黙らせられることが容易に起きた。未来だったので口に出すこともなかつた。

その基本となるタバスコを製造しようというのである。

「タバスコ・ソースならいけるかな…足滿おじさん、どう思う？」

「檸の木の樽にタバスコ・ペッパーと岩塩、穀物酢だつたか」

初遭遇時の震えが来るほどの辛さを思い出し、彼は少し顔をしかめながら原材料を挙げた。

「そ、オーワ樽に2～3年寝かす醸酵調味料だから、原材料を手に入れると少し時間がかかるかもしれないけど、保存に気を遣う部分が低いし、辛味を好む人には喜ばれるかな、と」

「……俺の食べるものに入れなければ良いんじゃないかな」
静子の姉の例のテレビ破壊案件の報復タバコ・トマトジュース事件を思い出しながら、足滿はぼそつと呴じた。

戦国小町苦労譚シヨートシヨート詰め合わせ（その

5)

『多目的軍用シャベル』

多目的軍用シャベル、よく軍事マニアなどの間で話題になるのは、中国人民解放軍の軍用シャベルのことである。

しかも、コレ、簡単にネット通販で普通に購入可能だつたりする。恐らく人民解放軍そのものの収益に充てるために製造・販売しているということだと思われる。

もちろん、この「多目的軍用シャベル」というカテゴリーで各国の軍でそれぞれの国で製造・採用された多彩な品々がある。

どんなものかイメージしづらいので簡単に言つてしまふと十徳ナイフのシャベル版とでも表現すれば良いのだろうか。

とにかく、これさえあれば軍事行動どころか、アウトドアでもとっても便利！ という素敵アイテムなのである。

主な機能としては、スコップとして当然の「掘る」、直角に曲げる蝶番部分があり折つて鍬として「耕す」、綺麗に洗えば片面が鋭利な刃になつていて鉈や包丁として「切る・断つ」、ほかの部分（刃の部分の反対側など）に鋸刃が施されていて「鋸引きで木を切る」、蝶番の一部がテコの原理を利用してきるようになつていてペンチ・ニッパーのように「摘まんで捩じる、挟み切る」、またハンマー替わりに「たたく」などと多機能すぎて乾いた笑いがでてくるほどなのである（モノによつてもつと多く機能を持つものもある）。

そんな携帶用多目的軍用シャベルをこの時代で再現し黒鍬衆に装備することを静子は目論んでいたのであつた。

「…ちょっと欲張りすぎかな？」

お世辞にもあまり上手とは言えないが、自分で描いた設計・図解を眺めながら彩に見せた。

しかしながら実物の知識が彼女にはない。

どんなものであるのか一向に頭の中で、その完成形を形作ることができなかつたので無表情な応えしかできなかつた。

「静子様、私には何のことを仰つているのか分かりませんので、ちゃんと説明していただいてよろしいですか？」

そつけない返事に静子は憮然としながら設計図から顔をあげた。
「彩ちゃん、何かやつぱり最近当たりつよくない!?」

『大神社碑／おおかみのやしろのひ／』

今は昔の物語。

尾張の地に大間口神を御使いにする女神ありし。

かの女神、日ノ本に吹き荒れた乱世を打ち払うがために織田上総之介信長の元に綾小路静子なる名を名乗り娘の姿で顕現せし。

大地の女神は山女でもあり醜女なり。

言わずもがな、いと聰明なる才媛なり。

数多の地の恵みを齎し尾張の民らの飢えを掃き清め。

数多の海の恵みをも引き込み民らを栄えさせ。

数多の英知の恵みで照らし新たな世の礎を作りし。

数多の商いを築き拓き国を富ませむ。

ひとたび戦になれば石火矢の雨を降らし仇なすものを打倒すなり。

信長公は世に第六天魔と囁かれん。

第六天魔は他化自在天なり。

仏法を修めるものの学びを深化させ欲界より解脱させるための門番なり。

仁比女に化身せし天女は「魔」を「天」に昇華させ政道に正道を打ち立てん。

戦国時代に来た当初より愛していた優しい狼たちを偲び建立した社。

もしも後の世に、このような文面が刻まれている碑が作られたことを静子が知つてしまつたならば、「……これつて……もしかして……変な神格化されてる…………」と、頭を抱えて布団の上をゴロゴロ転げまわりそうであつた。

『猫喫茶美濃舎』

基本、織田信長という人物は、かなり凝り性である。

また、後世の彼を誹謗中傷する文物から窺い知ることが難しい部分はあるのだが、意外に情緒豊かで身内に対して情愛に満ちた甘いところがあつた。

同じ人物に二回以上裏切られる。

裏切られても翻意を促す。

こういう記録がしつかり残つてゐるだけでも充分お人よしに見える。

一度なり逆らい弟を推戴しようとしながらも軍門に下つて以来重用された柴田、二回反逆し三度目の説得を試みられた松永弾正久秀などはその最たるものかもしれない。

大きく取り扱われないが、他の戦国大名らの血生臭い非道な行いを問うべきなのではと言えそうな話の方が多いのではないか。

やはり天下に手をかけながらも舞台から降りたことが一番起因しているのであろう。

歴史は結局のところ勝者の歴史でしかなく、彼よりも後の天下人が良いように見せるための宣伝工作が織り込まれていると見ることも必要なのだから。

閑話休題、静子の元からターキッショアンゴラを譲られてからのネコへの愛玩度合いの募らせ方は中々のものであつた。

虎次郎と名付けられたこの雄猫も信長によく懐き、彼の肩に登つて甘えている姿をもつて、正室の濃姫からは「妾を差し置いて愛の語らいをいしている」、と軽く弄られる程であつた。

ただ、猫を戯れるだけの存在として飼うという行為は非常に贅沢なことでもある。

京でのターキッショアンゴラの脱走騒動などから、その姿の愛くるしさにより都のネコとして「お白さま」と京の民たちに愛される一頭が飼われることになつたが、一層の事、より気軽に猫とのんびり戯れることができる茶店でも作るか! という話がどこからともなく立ち上がつた。

そう所謂現代における「猫カフエ」である。

京の都大路の一角に作られた「猫喫茶美濃舎」は、都の人々に絶大な人気を寄せられた。

その熱狂はほどなくして大店と言われる商人たちまでも巻き込み、新たな嗜みの一つに挙げられるほどにまでになる。

完全予約制で実験的に南蛮猫の販路も兼ねたこの店の運営を行っているのは、もちろん織田家であり、その収益は充分に見合うものかは南蛮猫の仕入れにかかつた莫大な費用をも遠くないうちに賄えると予想される成長を示していた。

その繁盛ぶりよりも稀に貸し切りにして悦に入っている某貴人や某天下人がいたとか、いないとか、は別の話。

戦国小町苦労譚シヨートシヨート詰め合わせ（その

6)

『雉も鳴かずば…つていうか…目の前で率先して撃つて撃つて？な案件』

「はつはつは、これは私に徹底的に打ち壊してくれ、とでも言っているのかな？」

基本、温厚な静子のこめかみのあたりに青筋がぴくぴくと浮かぶ。その日の彼女はいつになく不機嫌な気分へ誘われた。

これまで近衛前久の絡みで、それほど得意でもないのに歌会に参加することになったことに端を発し、更にはイエズス会のルイス・フロイスらとの会談、かつて依頼していたアガベ・アスール・テキラーナ・ウェーバー（中央・南アメリカ原産リュウゼツランの一種）の引き渡しがあつたのである。

過密な予定が立て込んでいた最中に、やつとの思いですべての案件に目鼻をつけてからの尾張への帰路の真つただ中に余計な問題が起きたのである。

浅井家のお家騒動にて北近江を牛耳った浅井左兵衛尉久政の手の者たちが性懲りもなく京と美濃をつなぐ街道に嫌がらせの関所を作ろうとしているところに遭遇してしまったのである。

もちろん、静かなる怒りを滾らせた静子の声に静子軍の面々は恐れ戦いた。

普段温厚な人物の怒りというものは周囲を凍らせる。

結果、作りかけの関所と浅井軍は速やかに殲滅・解体されたことは言うまでもない。

後に長可は顔を蒼褪めさせながらこう言つたという。

「アレはいけない。まじ、空氣やばかった……」

ちなみに、このときに移送されたアガベ・アスール・テキラーナ・ウェーバーは、多肉植物で一見サボテンの仲間のように見えるが別種

であり、蒸留酒のテキーラの原料になる。

『カクテル・マルガリータ』

静子の運営している街の一つにある醸造街。

いつのころからか、そこで手に入らない酒はないと言われるほどに様々な酒が造られていた。

日本酒（清酒・濁り酒）、焼酎（芋・そば）、ビール、ワイン（赤・ロゼ・白）、ラム酒（赤・白）、梅酒など盛沢山というか百花繚乱であった。

当初、この地では盛んでもなかつた酒造りだったが、静子が事業を起こしてから、本人が飲酒を禁じられていることの反動であるかのように種類は増え続けていた。

そして、他に原材料という部分から言うならば、ウォツカ（大麦、小麦、ライ麦、ジャガイモなど穀物）、モルトウイスキー（大麦麦芽）、グレーンウイスキー（トウモロコシや小麦などの穀物）、ブランデー（ブドウ）あたりは完成までの時間はともかく、今後、作り始めることができそうであった。

ギリシアのウーズやトルコのラクに代表されるウーズ効果を持つ酒（ブドウ、アニス、各種ハーブ）、歴史的に製造・販売禁止の歴史のあるスイス発祥のアブサン（ニガヨモギ、アニス、各種ハーブ）や中央・南アメリカの蒸留酒テキーラ（ブルーアガベ）、ヤシ酒（原材料が樹液の物とココナッツミルクを使ったものがある）あたりにまで手を伸ばすかは静子のみが知るというところであろうか。

「静づち、こないだ手に入れたあが一ペだつけ、アレも酒の材料なんつだっけ？」

新たに未知の酒の原材料と小耳にはさんだ慶次が興味津々と目を輝かせながら口を開いた。

「ん？ ブルーアガベは、テキーラっていう蒸留酒の材料だよ。でも、原材料として使えるまで五～十年ほど育てるのにかかるよ」

こともなげに彼女が答える。

「けつこう時間かかるんだな」

少し眉間に皺を寄せながら長可が口を挟む。

「結局のところ、何でも始めなければ完成はしないんだからね。それにアガベの仲間は環境に強いから栽培は楽な方だよ。私の手をすぐに離れると思うからつまらないけどね」

静子は自嘲気味に苦笑いを浮かべた。

慶次は朗らかに「まあ、静ちゃんがこうやつてイロイロ作ってくれるから俺たちも新しい酒を楽しめるんだから良いことつちやあ良いことだろ」と受け流す。

「テキーラできたら私も飲んでみたいカクテルがあるんだよね……禁酒はずしてもらえないかな……」

昔、静子は映画に登場し憧れたテキーラ・ベースのカクテル「マルガリータ」を思い浮かべ小さく呟いた。

『濃姫の影?』

お市の方は良くも悪くも遠慮のない人物である。

静子は思う。

やっぱり上様（信長）の妹なんだなあ、と。

現在、茶々と初、江らまだ幼い娘たちを連れて静子の屋敷に滞在している。

武家らしいと言えば武家らしいのだが、いつも簡単に食事のときに

は子供たちを乳母任せにしてしまう。

そして当人は、悠々と一人で静子らと膳を並べる。

元々は、彼女らは自身の部屋に食事が運ばれていたはずなのだが、今ではすっかり彩や長可、慶次、才蔵ら静子ファミリーと一緒に食事をすることに馴染んでいた。

「義姉上も食事は皆で食べるのが一番美味しい、と言つている」

「なのじやー」

お市の方の言葉に茶々と初が当たり前のことと言つよう大きく頷きながら後に続く。

眉間を人差し指で押さえながら頭痛をそこはかとなく感じ始めた静子の目には、すまし顔でいう彼女の背後にドヤ顔の濃姫が幻視された。

『華嶺なる天狗の転身』

怪しげな男であつた。

赤ら顔の天狗面に一本歯下駄の山伏の装い、身の丈六尺を超える無駄な肉のない筋肉の鎧に包まれた巨体は見るからに妖しい。

ちなみに山伏などが使つたとされる一本歯下駄は、山の中を移動するときは意外と歩きやすいとされる。

実際に使つてみた人物の感想は「かなり疲れる」であるのだが。

恐らく使用時に求められている平衡感覚、運動神経の難易度に使用者が到達できていなかつたということだけなのかもしない。

現在、彼は静子に仕える外交僧で華嶺と名乗つている。

名乗つてはいるというのは、実のところ伊勢の山間での修行に長らく勤しみ過ぎて己の名すら忘れてしまつて幽鬼の如く放浪していたからであつた。

元々、伊勢神宮へ山路で時に糊口をしのぐために旅人の荷物を失敬したり、獸から助けて米やらを無心・所望する天狗として噂された怪人物である。

伊勢参りへの参拝者の間から訴えがあり、このまま見過ごし続けることはできないと信孝が派遣した者たちは悉く翻弄され追い返された。

このままでは、治安を預かる身としては是非もなしと信孝からの依頼が静子に入る。

これを受けた静子は、静子謹製の配合の結果生まれた精神攻撃（カレー鍋）によつて調伏されて仕えたという経緯があつた。

このときの「カレー」のスペイスの香りに感動した当人は、天啓を受けたと自らを「華嶺」と号した。

食事なくして人は正しく人たり得ない事例は数多ある。

結局のところ、美味しいものは須らく物事を解決するべき正義なのであつた。

『ユキヒヨウ物語』

白い地毛に黒い斑紋が散らされている二匹。やけに大柄な子猫であった。

二匹とも尻尾をゆらゆらと立てながら、にやあにやあと愛らしい声で自己アピールをする。

暫くの間、手を離せない作業があり二匹の相手をできないでいると、普通の猫では見ることのできない行為をした。

長い尾の先の部分を口で咥えたのである。

心的負荷解消に自分の尾を咥える姿。

その様子を見た静子にはピンとくるものがあった。

子供の頃に連れて行つてもらつた某動物園で飼育されていた大型ネコ科絶滅危惧種の持つてゐる特有の行動が思い起されたのである。

それは白い毛皮に美しい斑紋がある美獣ユキヒヨウだ。

ところで、ユキヒヨウは「ヒヨウ」という名称が付いてゐるのだが、ヒヨウよりもトラに近い種類と言われている。

しかも、一般的に大型ネコ科動物の発する「がおー」という咆哮ができない。

その鳴き声はあまりにも猫らしい「にゃあ」なのである。

幼獣だと知らなければ、やけに大きい子猫? だなうとなることも充分起こりうる。

そんなユキヒヨウの「ゆつきー」「しろちよこ」の二頭は、今のところすくすくと大きく育つてゐる。

実際のところ見るからに猛獸なのだが、猫とは一線を画するその立派なガタイに似合わない「にやあーご」やら「なーご」と可愛らしく

鳴きながらヴィットマンたちからフリーになつている静子を見つけると今が絶好の機会と甘えて来るのである。

結局、急ぎの案件でないこともあり、もふもふの誘惑に抗うことができず手を止めてしまうのであつた。

二頭の顎を流されるように撫でながら静子はなんとなく思う。もしかして、こんなに可愛いんだから「猫喫茶美濃舎」に大きいネコとしてデビュー！しても大丈夫かも、と。

早速その考えを静子は彩に伝えると返事は渉々しくないものであつた。

静子に聞かれた彼女は頭痛がしているかのように眉間に皺を寄せて額を手で押さえつつ口を開いた。

「その二頭を可愛いと愛でることができるのは静子様だけです」その口調は反論に応じない決意に満ちているきつぱりとしたモノであつた。

『生きる』

生きること、それは他の命を奪い食らうことに他ならない。

逆に何も奪うことない営みは、優しい生き方かもしれないが何も解決できないことが多い。

無力に縮こまつて怯えるだけでは、結局のところ何も得ることはできないのである。

彼女は戦の後に起きる乱取りという蹂躪によつて全てを失つた。まだ幼い少女は両親が最後の命を振り絞つて隠してくれた狭い物入の中に設けられている地下保管庫に身を強張らせながら隠れていった。

保管庫と言つても粗末なものであるが、年貢を納めるときに種糲も含めて全て取られないために必要なものであつた。

そこは巧妙にできた二重底になつており、彼女の隠れている底板の上には全く価値がなさそうな細々とした物が乱雑に乗せられていた。息を殺しながら彼女の手には唯一の武器として鉈が、指が痛くなるほど強く握られていた。

乱暴に戸を蹴破る音。

野蛮な雄叫び。

両親のくぐもつた命のこと切れる音。

決して裕福と言えない村の家々を荒らしている雑兵たちは、あまりの実入りの少なさに何時になく荒れているようだ。

がさがさと部屋の中を漁る音が彼女の隠れている場所に近づいてくる。

そして、無造作に彼女の隠れている物入の蓋が開けられる。

「ちつ、シケた村だつ。次いつ！行くぞ次いゝ！」

結局、物入の二重底の奥底で身を硬くし息を潜めている少女に気が付かなかつた。

荒々しいガサツな声が遠くに離れていく。

不幸中の幸いに彼女は命を拾つた。

そして、いつまでも、物入の奥で少女は声を殺して慟哭した。

しかし、彼女は頭を垂れて俯いているだけではなかつた。

歯を食いしばつてもう一度顔を上げて立ち上がり運命を摑むことになる。

そんな少女の小さな物語。

しばらく後にまだ幼い彩という名の少女が、略奪を受けた村の被害状況を調べに来た森可成の手の者に拾われるのはまた別の話である。

『連発式ゴム鉄砲』

足満が嬉々として作つて遊んでいたゴム鉄砲。

職人たちの間で大流行となり、それぞれが独自の工夫をして魔改造されていた。

「どうだい、俺のは十連発の連装弾だ！」

「やるな、だが数が多くりや良いつてもんじやねえ。おいらの九連装だが滑らかな装弾と素早い発射には敵わねえよ」

などというやり取りが交わされていた。

仕事の合間の手慰みと言えども、静子の技術街の職人の面々である。

その匠の技がいかんなく無駄に發揮されまくっていた。

熱を帯びた彼らの遊びは、何時しか信長の耳に入ることになつた。まず、彼が考えたのは、これは遊びの範疇に留めずに何らかの武器に応用できなか？ということであつた。

特に構造に類似点がありそうなクロスボウの改良に繋がりそうな気がしたのである。

実のところ、古くから中国に連弩というものがある。

史記に始皇帝が連弩でサメを撃つたという記述があることからも、かなり古い歴史を持つ。

ただ、その時代の連弩は速射性を求めた結果、命中率と射程距離が落ちてしまう代物であつた。

そのため威力の低さを補うために毒矢を装填されることが多かつたという。

同時多発的に西欧でも紀元前3世紀ごろにギリシアでも攻城兵器として姿を現している。

こちらは二列のチエーン駆動式で複雑な機構であるがかなり強力な大型なものであつた。

閑話休題、弾連装式ゴム鉄砲である。

作りとしては伸ばしたゴムを引っかける部分に複数の歯車を利用したモノが多い。

しかしながら、連装式クロスボウだけでなく利用しているゴムの部分を見方によつては設置式の投石機にも応用できそうに見えるモノでもあり、また、様々な発想の種が後から芽吹きそうに思えたので

あつた。

この大きさならば色々と気軽に試すことができそうである。

信長は発想の発露・熟成を促すことを目指すことに舵を切ることにした。

要するに自由な発想の「遊び」から知恵を生み出すということである。

そうして「究極ゴム鉄砲作成大会」が織田の領土で大々的に開かれることになる。

それを耳にした足満が普段とは異なり過ぎる様子で周囲を引かせるほど力を入れて参加することを表明したという。

戦国小町苦労譚シヨートシヨート詰め合わせ（その8）

『水菓子狂詩曲』

今、将に新たな甘味が尾張で生まれようとしていた。

ご存じだろうか？「美味しい水の和菓子～水信〇餅～」というものを。

戦国の世からみたら遙か未来にギリギリの安排で作られた限りなく水に近い和菓子である。

非常に消費期限が短いために、作られてから数時間のうちに食べなければその甘味の真価を充分に味わいつくせないとシロモノだ。実のところ静子もテレビで紹介しているところを偶然に目にしたことがあるだけであつた。

だが、ささやかながらせつかくの権力を持つ身になつたのである。一度作つて食べてみてもバチは当たらないということで作つてみた。

レシピは綺麗な水、黒蜜、天草などで特別なものではない。

基本的に非常に単純であるが、異常なまでに鮮度と使う材料の搭配にこだわった部分が特に難しい。

ただ、今の静子の立場はとても多忙であり、一つの和菓子作りに彼女自身が時間をかけてかまけているワケにはいかなかつた。仕方がないので、尾張にある静子お抱えの和菓子職人に起草した依頼書をだす形にせざるをえなかつた。

この時代の水の水質はよっぽどのことがない限り非常に良い。

工業化で汚染物質が垂れ流されているということも基本的にはない。生活排水による水質悪化もたかが知れている。

荒れに荒れ果ててしまつてている人の世の傍らで滾々と湧き出る清水。

良質な材料が容易に手に入るのだから、彼女にはこの稀有な「食べ

る水の和菓子」を作らないという選択肢はないのであつた。

先の仁比壳の発案による菓子作りの件で帝と宮中から尾張の和菓子職人たちは評価された。

これは大きな興奮と喜びを彼らにもたらした。

そして、彼らは新たな菓子の創造というものに並々ならぬ情熱を傾けて日々研究しているのである。

今回の静子からの依頼は単純でありながらも究極の菓子を作るという彼らへの挑戦状であると認識された。

和菓子職人たちの情熱を燃え上がらせたのは当然だつたのである。

そんな傍らで、彼女が失念していたことがある。

彼女の周辺には、織田家中の者たちの間者（笑）に囲まれて生活していることに。

静子は織田家中で地位が上ると共にその家を大きいものへ変えてきた。

本人に至つては手狭に過ぎなければ充分であるのだが、大きく出世してしまつた立場が許してくれない。

結果として手が足りないなら、「うちの娘を侍女に」などという話があちらこちらから舞い込んでくる。

もちろん、身元の怪しい人物を採用するわけにもいかない。

結果、家中の身内を家人として雇うことを是とすることになる。

自然と各々の身内への新作料理の情報漏洩の元を抱え込むことになつたのであつた。

静子が何やら新しい菓子を作ろうとしているという話は瞬く間に広がつた。

それは野火もかくやというほどに重臣たちの間を駆け巡つたのである。

織田家中だけでなく三河の徳川はおろか越後の上杉にまで。

もちろん、安土の信長の耳にもしつかり入るということは当然のこと

とであつた。

信長が知るということは、あの人物にも当然伝わるということである。

濃姫である。

お気づきであろうか？

濃姫は静子のイメージしている不動の「織田家フリーダム・ランキングN.O. 1」「織田家・食道楽ランキングN.O. 1」の二冠王という人物である。

もちろん、この新しい菓子の話を聞いた濃姫は直近の予定が自身にないことを確認すると、早速、いつもの面子である家臣奥方軍団のまつやねね、えい達を引き連れて静子の邸宅に向けて出発したのであつた。

そして、やつとできた美しくも瑞々しい完成品を前にした静子の前に織田家のフリーダム&食道楽の二冠王者が顕現するのである。

「また妾を差し置いて美味しいものをこつそり食べようとは静子も隅に置けないのう」という微妙に微笑ましいかもしれない圧迫がいつも通りの風景として生まれるのであつた。

『どうすんのコレ』

静子の元には様々な海外の生物や植物が集まる。

基本的に彼女の生まれた時代には絶滅してしまった生物が多い。

それは、彼女の手が届く範囲でだが保護するという意味合いが強かつた。

そんな中、「もう要求したモノ以外はいりません」という彼女の言葉のやりとりが上手く伝わらずに送り届けられた生き物がいくつかいた。

「珍しい生き物を覆面宰相殿は喜ぶ」ことでイエズス会は頑張った。

すごくスゴク凄く頑張った。

その結果がある鳥を彼女の元へ連れてきたのであつた。

フクロウオウムである。

マオリ族の言葉で「カーカーポー」または「カカポ」と呼ばれる夜行性の飛べない大型のオウム。

確かに珍鳥であつた。

もちろん、未来における絶滅危惧種もある。

だが、飼育する上で彼女はこの鳥の持つ大きな問題を知っていた。とても長生きなのだ。

大切なことだからもう一度言う。

非常に長命なのである！

何せ最大で95年ほど生きる鳥である。

しかも、その生態も良く分かっていない生き物である。

自分のできる範囲を遥かに凌駕するこの鳥の寿命が手に余ることこの上もない。

そして、頭を抱えて「どうするのよ。コレ……」とこぼしたのは言うまでもない。

『時渡り』

血糊で切れ味の落ちた刀を投げ捨て新たな刀へ最後の一一本へを男は手に持つ。

三日月宗近。

平安時代の刀匠・三条宗近の作で後に国宝に指定されることになる銘刀である。

また、天下五剣と呼ばれる名刀の中で最も美しい刀と評されている。

ここは二条御所。

永禄八年（西暦1569年）五月下旬、室町幕府足利将軍家・十三代將軍足利義輝は、三好三人衆と松永久道に兵一万で攻められる。獅子奮迅の抵抗をするもまさに最後の時を迎えるとしていた。剣豪將軍の名に相応しく義輝に斬り棄てられた兵が周囲に倒れ伏している。

ざつと三十人以上は転がっているであろうか。

先日、伴天連繫がりで知り合った南蛮商人から献上された文物も飛び散った血と贓物を被り真っ赤になつてていることが目の端に映つた。そして、無自覚に視界に捉えたそれ／＼南蛮の奇妙な黒く染められた皮の装丁の本／＼が大量に浴びた有象無象に染められ、風に煽られたのかばらばらと音を立て更に血を吸つた。

まるで、奇怪な意思を持つてゐるかのように……

そして、義輝はもはやこれまでと自刃する決意をした、その時、それは起きた。

不意に義輝の囮んでいる空間の音と色が消えたのである。

妙に覚めた頭でどこか遠い世界に隔絶されていたような違和感を認識することもなく義輝はあたりを首を動かさずに目だけで睥睨する。

全てが停止していた。

沈黙の世界を壊す場違いな闖入者がコツコツと足音を立てながら現れる。

山伏姿の行者が不安定そうな一歯の下駄で器用に歩いてきたのであつた。

その頭には頭巾を被つており顔がよく見えない。

義輝は誰何しようとするも、身体が全く動かない。

金縛りにあつたように動けないことに気が付く。

何者かと精一杯目を凝らすも、その貌には滑らかな漆黒の空間だけが広がりその中を星が瞬いていた。

奇怪な行者は固まつてゐる義輝を尻目に、周囲の異様な状況も意に介さず血に染められた黒革の書を持つ。

この行者は驚くほどに背が高く六尺以上ある。

行者の大きな掌で本はパラパラと開かれる。

そして唐突に本に火が灯つた。

あつという間のことであつた。

ただ火が付いたというモノではない。

そして黒い行者の手の中に生まれた炎ちうよりは閃光の爆発と共にソレがやつてきた。

義輝と行者の間に川の急流の落ち込みなどで見かける虹色の泡の様なものが生まれた。

目の前に生じたそれはふわふわと浮遊する。

そして、その一つの球体は更なる球体を生み出し、幾つもの球体が連なる群体へと成長していく。

泡の一つの直径は一尺から二尺ほどの大きさでまちまちである。

群体が増えるのが止まると、その一つ一つに突如として横やら縦やら無秩序に亀裂が走り淡い光を放ち始めた。

目が開いた。

数多の目が彼を見つめる。

目眼瞳めメ……あまりの異形の出現に義輝は金縛りに縛られながら無言で混乱と恐怖に叫んだ。

そして目の泡は燐光を放ちながら消えていく。

そこには義輝も奇怪な行者もいなかつた。
生きている者は誰もいない。

その日、三好と松永による足利義輝への謀反が起きた。
しかし、義輝の首も遺体も見つけられることはなかつた。
滅茶苦茶に損壊された死体が多くあつたため彼らは將軍の死を疑
わなかつた。
この世界で在りえない何かが起きたことに気が付く者はいなかつ
た。

戦国小町苦労譚シヨートシヨート詰め合わせ（その

9)

『POUAKAI～注意報？』

ハーストイーグルという鷲を存じであろうか？

かつてニュージーランドにいた絶滅種である大型のワシである。そのサイズは翼を広げると3メートルに達する猛禽類としての史上最大種であった。

このワシ、同じ地域に生息していて鳥類としての史上最大の鳥であるモア（これも絶滅種）を狩つていたと言われているのだからスケールが大きい。

そして、恐らくではあるがかつて小耳にはさんだ噂この巨大なワシも宣教師らから大名に贈られるたびに、結局、飼育することを拒否されたらい回しにされていていたということが容易にうかがえる。

で、である。

信長とフロイスとの会談の時に同行していない静子へ、またもやある新たな打診があった。

何でも大柄な飛べない種で、たいへん美しい羽を持つ珍しい鳥が手に入ったというのである。

「……大きくて綺麗な羽の飛べない鳥？……」

静子の脳裏に危険を知らせるアラートがけたたましく鳴り響く。

もちろん、彼女の頭に浮かんだのは鮮やかな青と赤。

ギネスにも「世界で最も危険な鳥」として認定されてしまっているアノ鳥である。

それは、オーストラリア、インドネシア、パプアニューギニアなどの熱帯雨林を住処にしている鳥、ヒクイドリ（マオリ族の言葉ではPouakai：ポウアカイ）であった。

食性は果実類を主にしている雑食で、体高一七〇センチほどの巨体

であり、飛べないかわりの強力な足は時速約五〇キロほどで走り廻る。

普段は臆病とも言える性質を示すのだが、いざ、身の危険を感じて攻撃に転ずると、その強靭な足による鋭い爪のおまけ付きの蹴りは肉を裂き骨を碎くほどである。

人間がこの恐るべきキックを受けると、皮膚が裂けて内臓が飛び出すほどであるという。

所謂、蹴られて飛び出てじやじやじやじやんである。

もちろん、その打診を受けた彼女の返答は決まっていた。

静子はきつぱりと、どこかカクカクした感じで口を開いたという。

「ケツコウデス」

『キノコ症候群』

「わしはキノコは苦手じゃ」

種類の選別のために床一面に広げられた山の幸を目にしながら、俄かに足満は忌々し気に眉を顰めて断言した。

その瞳の中には嫌悪の色さえあるようだ。

「えつと……おじさん？」

そんな足満の苦々し気な言葉に山の恵みに変な踊りを舞いそうになっていた静子が面食らった。

「あの……えつと……」

「知つておるか？ある種の茸には恐ろしい力がある。食べた人間をキノコ人間の化け物に変えてしまうこともあるんだ！」

そして、「…………ああ…………」と溜息を吐き出し微妙な表情を浮かべた。

常識を身に着けるために様々な映画作品などを見ている中に姉が紛れ込ました昭和のころに作られた某特撮怪奇映画作品を見てしまったコトを。

その作品を簡単に説明すると、見渡す限りキノコばかりの無人島に遭難した人々が、その地に生えているキノコを口してしまって、体中から食べたものと同じソレに覆われて周囲の人間を襲い始めるという悪夢の作品である。

後のゾンビ映画や吸血鬼映画などの怪物が伝染して増えるホラー作品への系譜とも言えた。

確かに何も予備知識なくドキュメンタリーだと思つてアノ作品を見たらトラウマになりそうではある。

「キノコ人間は周りの人に自分に生えたキノコを食わせようと襲つてくるんじやつ！」

目を向いて熱弁する足満の姿はイロイロとアレな感じであつた。

ただ、それを信じてしまうのもどうであろう？

姉の所業に端を発したとは言え、静子はそう思はざる得ないのだが。

少々バグつてしまつていて足満の後頭部へチヨップを入れつつ、彼女は仕方なくも何時もの台詞をきつぱりとした口調で言い切つた。「アレはただの創作作品です！」

『同人誌即売会誕生？』

近衛前久の発行している情報誌に妖しげな小説作品が投稿されるようになつてから一部の者達が熱烈歓迎をした。

その結果「それらを集めた作品集を」という要望が次々と前久へと届いたという。

さて、このような作品群であるが、現代においてBLと呼ばれている創作作品である。

根本的に「BL」という名詞を「存じない紳士淑女諸君もおられる」と思う。

ぶつちやけ「ほもー」なお話とイメージしていただけば良い。

所謂、後の世での腐っている人たちは、この時代にもけつこうな数で存在しているんだ」と静子は生暖かい目で義父の言葉を聞いていた。

そして公家ではあるが充分以上に商売つ氣のある前久である。

これだけ話題になるのならば、資金調達の糸口になると静子に販路としてどのような方法が良いか?と相談を受けたのであった。

その存在を認識しても、その世界を楽しむ素養のない彼女としては「お好きにどうぞ」としか言えない事案であった。

多分、公卿たちをアブノーマルな事柄で精神汚染により堕落させて、権謀術策を謀るリソースを削るとかつてないよな」とか思いながら……

『鉄塊』

鍛治師たちの町に巡察に訪れた静子が何やら鍛治場が騒がしい場面に出くわした。

それは巨大な鉄塊であった。

三人がかりの鎖で吊るされたそれは、身の丈を超える巨大な鉄の板にも見える。

普通の人間では、まず持ち上げることすらできないような巨大な剣。

どこかで見たことがあるモノであつた。

その喧騒の中心には足満と長可がいた。

何やら足満は興奮した面持ちで熱く語つてることが耳に入る。

「……天下一の最強の武士～もののふ～を目指すなら、やはりコレを使えなければならぬ！」

「お前なら使えるはずだ!!」

「これは『りゆうごろし』と言つて龍をも斬ることができる剣だ!!!」

おそらく、この「鉄の塊の何か」を見せるためだけに、無理やり連れて来られたらしい長可の慄然とした声が聞こえてくる。

「…………こんなん持てないぞ……」

どうやら、またもや足満がどこかバグつてゐるようであつた。

「ナニモミテイナイ。ナニモミテイナイ……」と呟きつつ、静子は巻き込まれないように回れ右をして立ち去つていつた。